

幼児教育に関する情報収集と 幼児教育モデルの提案

お茶の水女子大学
開発途上国女子教育協力センター
報告者: 浜野 隆
2006年4月5日 現職教員派遣前研修

目次

- 1. 幼児教育・ECDの意義
- 2. 本拠点の活動目的と活動内容
 - (1) 活動目的
 - (2) 活動内容
- 3. まとめ

1. 幼児教育・ECDの意義

1. 幼児教育・ECDの意義

- 幼児教育とECD
 - ECD: Early Childhood Development
 - ECE: Early Childhood Education
 - ECCD: Early Childhood Care and Development
 - ECCE: Early Childhood Care and Education
 - 出生から就学前までの乳幼児の身体的・心理的・知的・社会的発達を促すための、乳幼児および保護者に対して行うケアと教育
 - 幼児教育はECDの一部
- 本拠点の立場
 - ECDの観点から、幼児教育・保育を主要なターゲットとし、本学における発達心理学・幼児教育学・保育学の経験の蓄積を活用した研究活動を行う

1. 幼児教育・ECDの意義

- 乳幼児期における発達
 - 脳の発達: 脳重量: 4~6歳までに大人の約95%に。神経ネットワークの完成
 - 知覚の発達: 視聴覚、共感覚の発達
 - 認知発達: 言葉や数の概念の発達、メタ認知の発達
 - 社会性の発達: 共感性や道徳性の発達

乳幼児期は、人生において決定的に重要な時期



- 初等教育のためのレディネスの形成
- 1990年以降の開発目標である「人間開発」における重要な課題

1. 幼児教育・ECDの意義

- 基礎教育としてのECD
 - 1990年「万人のための教育の世界宣言(EFA宣言)」
第5条 基礎教育の意味と範囲の拡大
「・・・基礎教育の範囲は、以下の内容を含む。
学習は出生と共に始まる。これは幼児期のケアと早期教育の必要性を意味する。」
 - ECDは基礎教育の一部である
 - 例: EFA-GMR(2007)のテーマ

1. 幼児教育・ECDの意義

- 2000年 ダカール行動枠組み
 - (1)就学前教育の拡大・改善
 - (2)2015年までに、すべての子どもの無償初等教育へのアクセス確保
 - (3)青年及び成人の学習ニーズに対する十分な対応
 - (4)2015年までに成人識字率の50%の改善と、成人の基礎教育へのアクセスの平等の確保
 - (5)2005年までに初等中等教育における男女格差の解消、2015年までに教育の場における男女平等の達成
 - (6)教育の質的向上

1. 幼児教育・ECDの意義

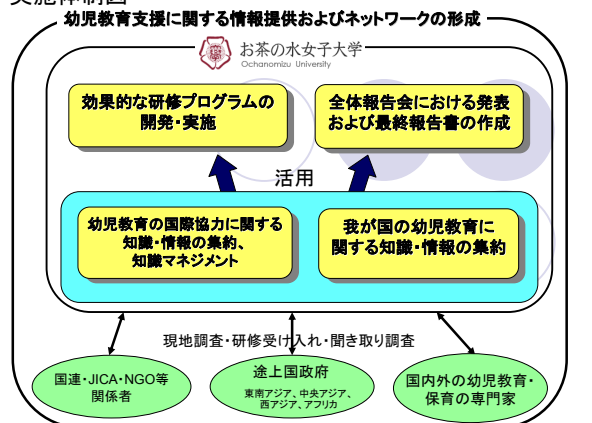
- 世界銀行(2001):ECDの収益率の高さ
- 貧困削減と基礎教育の普遍化という開発課題の達成において、ECDの普及が有効な手立てとなりうる
- ECDの短期的・長期的効果
 - 小学校以上の教育での留年や中途退学の減少
 - 子どもの身体的・知的・情緒的な発達促進
 - 家庭や地域との連携強化
 - 母親の就労支援
 - 女子教育へのインパクト
 - 経済成長の促進
- 特に貧困下で弱者となりやすい子どもと女性に対する大きな効果

2. 本拠点の活動目的と活動内容

本拠点の活動目的と活動内容

- 活動目的
我が国の幼児教育分野における国際協力を活性化し、体系的に行っていくための基盤を形成する
- 活動内容
 - ①幼児教育の国際協力に関する知識・情報の集約、知識マネジメント
 - ②我が国の幼児教育に関する知識・情報の集約
 - ③効果的な研修プログラムの開発および研修の実施
 - ④幼児教育支援に関する情報提供およびネットワークの形成

実施体制図



活動内容

- ①幼児教育の国際協力に関する知識・情報の集約、知識マネジメント
1. 幼児教育分野の国際協力プロジェクトのレビュー
 2. 現地調査の実施
 3. 知識マネジメント

ECD・幼児教育支援の国際的動向

- 二国間援助ではほとんどされていない
- 二国間援助の場合は、連携事業がほとんど
- 政策支援機関としてのユネスコ
- 実施機関としての世銀、ユニセフ、NGO
- 教員研修、教材開発、啓蒙、施設建設等
- 他部門との連携
- 基礎教育総合プログラムの一環として
- 母子保健、栄養改善等保健セクターとの連携プロジェクトが多い

幼児教育への協力の主要な課題

- 量的拡大、質的改善、格差是正
- マルチセクターから生じる問題
- 不利な状況にある子どもたち (disadvantage, vulnerable)にどのように教育を保障するか
- 適切なターゲティングをどう確保するか
- 持続性をどう確保するか (プロジェクトには終わりがあがる。財政的、組織的継続性)
- 持続性確保のために地域住民・大衆組織の参加をどう促進するか

日本の協力

- 「経験の浅い分野」
- 協力隊派遣
- 開発調査 (セネガル)
- 草の根無償
- NGOとの連携
- 初等教育がある程度普遍化段階に達した国では需要が拡大する
- 最貧国や重債務国では相手国側のコミットメント次第

幼児教育の国際協力プロジェクトレビュー

- 世界銀行
- ECD単独事業と
- 1. ECD単独事業
- プロジェクトプロファイルの整理・和訳
- 2. プロジェクトコンポーネントとしてのECD事業
- 保健医療や貧困削減、ソーシャルプロテクション (社会的保護) プロジェクトの一部
- ECDの位置づけ・規模、傾向のまとめ
- ユニセフ: 統合的ECD

NGOプロジェクト事例

- 昨年の報告会での指摘
- SCJ (セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン)
- ベトナム
- 総合的子どもの発達事業
- 子どものための栄養改善促進活動、妊産婦ケア
- 家庭での菜園や家畜飼育
- 行政への提言 (アドボカシー) 活動
- 幼児教育事業
- 幼稚園と保育園の先生に対する子どもの養育の方法、園での給食や健康診断、おもちゃ作り、本の読み聞かせなどについての指導

2. 現地調査の実施

- 目的
 - 行財政の体制、教員養成の現状、幼児教育と初等教育の関連性、国際協力の動向 等の調査
- 方法
 - 統一の質問項目を用いた、幼児教育の実態に関する調査
 - 教員養成校の見学および教師・学生との面接
 - JICA現地事務所担当者、シニア海外ボランティアおよび協力隊員との懇談、NGO関係者の活動の調査
 - 大学関係者との幼児教育の研究者との面接
- 調査国
 - 【2003年度】マレーシア、カンボジア
 - 【2004年度】マレーシア、ベトナム、スリランカ、カンボジア、ネパール、パキスタン
 - 【2005年度】ベトナム、インドネシア、フィリピン、マレーシア

3. 知識マネジメント

- 下記の資料を本課題のホームページにて公開
 - 現地調査報告
 - 幼児教育の実態に関する調査シート
 - 研修プログラム
 - 研修資料
 - 『幼児教育ハンドブック』(英語版・日本語版)
 - 映像資料「日本の幼稚園の一日」(予定)
 - 歴史資料「日本の就学前教育」(予定)
 - 幼児教育に関する資料のソース(入手先)等
 - **公開するだけでなく、資料へのコメントを集約**

活動内容

②我が国の幼児教育に関する知識・情報の集約

1. 国内の幼児教育に関する学術論文、紀要、報告書等の収集およびデータベース化
2. 『幼児教育ハンドブック』『Early Childhood Education Handbook』の作成
3. 日本の幼児教育に関する「映像資料」の作成
4. 日本の幼児教育に関する「歴史資料」の作成

1. 国内の幼児教育に関する学術論文、紀要、報告書等の収集およびデータベース化

- 目的
 - 我が国の幼児教育に関する文献の収集・整理

■ 収集データ

文部科学省および全国自治体指定園研究報告書・幼稚園紀要、全国幼稚園協議会による調査報告書および研究紀要、学術研究報告書等
計310点

拠点システム電子アーカイブへ登録済み

2. 『幼児教育ハンドブック』『Early Childhood Education Handbook』の作成

- 我が国の幼児教育の理論と実践を1冊に集約
- 途上国における活動のための実践例、応用のヒント
- 主に日本の国際協力関係者の参考書としての用途を想定

<目次>
まえがき

第1部 幼児教育の考え方

- 1 日本の幼児教育の枠組みと仕組み
- 2 保育において子どもの発達を促す
- 3 幼児教育の実践事例にみる指導の仕方
- 4 乳幼児の発達の概要

第2部 幼児教育の実践

- 1 保育の原理を実践につなげる手がかり
- 2 カリキュラムづくりの概要
- 3 年間指導計画・月案・週案・日案の作り方
- 4 幼稚園の1日
- 5 保育内容
- 6 園の環境の構成
- 7 教材づくり
- 8 保護者との連携-幼児教育の理解と協力に向けて-
- 9 教師自らによる保育の改善の方法

第3部 途上国で幼児教育を支援するために



5-3 言語の指導:コミュニケーション手段としての文字や書画を使った活動

実践的なトピック

基本: 算定算定と算定算定

教育的意義
→具体的な活動の背後にある「意味」を明示

基本: 算定算定と算定算定

写真を多用

実践的なトピック

写真を多用

活動を行う際の留意点

途上国における活動の応用とヒント

本日の配布資料

- 「1. 報告骨子」
- 「2. JOCVより: 幼児教育ハンドブックに対する意見及び活用事例」
- 問い合わせ先
- E-mail: hamano@cc.ocha.ac.jp
- 拠点ホームページ:
<http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~eccd/>

3. 日本の幼児教育に関する「映像資料」の作成 (日本語版・英語版)

日本の幼稚園の一日の流れ、保育者のあり方、保護者との関係などについて、映像資料により説明

<構成>

1. 登園準備
2. 登園
3. 登園後の活動
4. 片付けと昼食
5. 午後の活動
6. 帰り
7. 子ども達が帰った後に
※年間行事
※保護者との関係

4. 日本の幼児教育に関する「歴史資料」の作成 (日本語版・英語版)

我が国の現在の幼児教育形態がどのように構成されてきたのかというメカニズムを整理・分析
<章立て>

序章 開発途上国の教育課題

I部 日本の幼児教育史の概観

II部 幼児教育制度の整備と幼稚園の量的拡大

1. 教育行政
2. 教育財政
3. 保育会の役割と機能
4. 幼稚園の量的拡大
5. 保育所の整備と量的拡大

III部 幼児教育の方法と内容の改善

1. 「子ども」を中心とする教育方法
2. 教育課程(カリキュラム)
3. 保育所の保育方法と内容
4. 指導計画
5. 保育環境の整備

IV部 保育者の養成と研修

1. 保育者の養成と待遇
2. 保育者の研修

全体のまとめ-開発途上国の幼児教育を考えるために-

付録:統計資料など

活動報告

③効果的な研修プログラムの開発および研修の実施

・研修の対象: 教員、行政官、研究者

1. 現地における研修

・スリランカにおける『幼児教育ハンドブック』を用いた教員研修プログラム実施

2. 来日研修

- ・ネパール教育省ECD担当者の来日研修
- ・モンゴル研究者の来日研修
- ・ベトナム行政官の来日研修

1. 現地における研修

スリランカにおける『幼児教育ハンドブック』を用いた研修プログラム

- 日時: 2004年9月20日・22日
- 場所: スリランカ ガンボラ地区・コロンボ地区
- 対象: 現地の幼稚園教諭 ほか 計75名
- 方法
 - 講義と実技による、各1日間の研修
 - 『幼児教育ハンドブック』の一部を現地語(シンハラ語)に翻訳して配布
 - NGO「スランガニ基金」との共催
 - 研修やハンドブックに関するディスカッションおよびアンケート調査の実施

1. 現地における研修

■ 研修プログラム

1. 幼稚園の1日(講義)
2. 伝統的な文化活動の指導(講義・実技)
3. 言語・数量・環境の指導(講義・実技)
4. ディスカッション



2. 来日研修

■ ネパール教育省ECD担当者の来日研修

- 日時: 2004年12月12～18日
- 対象: ネパール教育省ECD担当者3名 (UNESCOカトマンズ事務所からの委託事業)

■ モンゴル研究者の来日研修

- 日時: 2005年11月7～14日
- 対象: モンゴル国立教育大学就学前カレッジ 学長 1名

■ ベトナム行政官の来日研修

- 日時: 2006年1月7～14日
- 対象: ベトナム教育省幼児教育担当官 2名

2. 来日研修

■ 研修プログラム

- 多様な幼稚園・保育所、小学校の見学
- 現職教員とのディスカッション
- 文部科学省の幼児教育担当官との懇談
- JICA職員によるセネガル事業に関する講義
- 保育者養成大学の見学
- お茶の水女子大学教員による講義
- 国際セミナーの開催
- お茶の水女子大学教員による講義
- フィードバックミーティングの開催、などの組合せ

活動内容

④知識・情報の提供およびネットワークの形成

1. シンポジウムの開催
2. 「国際教育協力セミナー」の開催
3. ホームページによる情報発信
4. 国内・国際ネットワークの形成
 - ①国内 (JICA、JBIC、NGOなど)
 - ②国際 (国際機関、途上国行政機関、大学等)

1. シンポジウムの開催

■ シンポジウム「幼児教育に関する途上国協力強化のための拠点システム構築—情報収集とモデルの構築—」

- 日時: 2003年12月13日(土) 13:00～16:00

■ プログラム

- 途上国幼児教育支援における日本の幼児教育経験の可能性
- 途上国支援の現状と課題、および本事業への期待
- 海外現地調査報告
- 幼児教育ハンドブックの概要と解説

■ 国際シンポジウム「アジアにおける子どもの発達と教育—保育・幼児教育分野における国際協力のあり方を考える—」

- 日時: 2005年1月8日(土) 13:00～16:00

■ プログラム

- 「EFAと幼児教育—ネパールの事例をもとに—」
- 「スリランカの幼児教育における日本の技術協力—いくつかの事例を中心に—」
- 「中国における幼児教育の現状と課題」

2. 「国際教育協力セミナー」の開催

【2003年度】

- 第1回: 「青年海外協力隊における幼児教育協力」
(2003/5/19) 前田美知子・坪川紅美 (青年海外協力隊技術専門員)
- 第2回: 「カンボジアにおける幼児教育の現状と課題—NGOの視点から—」
(2003/8/22) 峯村里香 (幼い難民を考える会・事務局長)
- 第3回: 「スリランカにおける幼児教育の現状と課題—NGOの視点から—」
(2003/10/1) 馬場繁子 (スランガニ基金・代表)

2. 「国際教育協力セミナー」の開催

【2004年度】

- 第1回: 「モンゴルにおける幼児教育の現状と課題—JICAシニア海外ボランティアの視点から—」
(2004/5/19) 松村美智子 (JICAシニア海外ボランティア)
- 第2回: 「世界・日本の教育協力の潮流」
(2004/6/10) 黒田一雄 (早稲田大学アジア太平洋研究科)
- 第3回: 「カンボジアにおける幼児教育の現状と課題—JICAシニア海外ボランティアの視点から—」
(2004/7/17) 野村美知子 (元JICAシニア海外ボランティア)
- 第4回: 「国際協力『セネガルの子どもセンター設立』から学んだこと」
(2004/9/25) 神長美津子 (文部科学省幼児教育課)
- 第5回: 「JICAの基礎教育協力とECD」
(2004/10/26) 萱島信子 (JICA基礎教育グループ)
- 第6回: 「ベトナムにおける乳幼児のケアと教育」
(2004/12/9) 箕浦康子 (お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター)
- 第7回: 「中国雲南省における幼児教育の現状」
(2005/3/9) 曹 能秀 (雲南師範大学)

2. 「国際教育協力セミナー」の開催

【2005年度】

第1回: 「子どもの保健—ガーナでの経験を踏まえて—」
(2005/7/4) 榊原洋一氏(お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授)

第2回: 「世界銀行のECD支援」
(2005/10/13) 吉田和浩氏(国際協力銀行開発セクター部課長)

第3回: 「モンゴルにおける幼児教育の現状と課題」
(2005/11/10) Dr.Jamsrandorj Batdeliger氏
(モンゴル国立教育大学 就学前教育カレッジ学長)

第4回: 「乳幼児の最善の発達に向けた国際支援—その現状と課題—」
(2005/12/13) 三輪 千明氏(名古屋大学大学院国際開発研究科 助手)

第5回: 「ベトナムにおける幼児教育の現状と課題」
(2006/1/12) Le Thi Anh Tuyet氏(ベトナム教育訓練省幼児教育局長)
guyen Thi Thanh Giang氏(ベトナム教育訓練省幼児教育局専門官)

第6回:(予定) 「ネパールにおける乳幼児保健(仮題)」
(2006/2下旬) ネパールで活動する小児科医

3. ホームページによる情報発信

■ 目的: 当拠点の活動に関する情報発信および国際協力に関する情報発信・交換

■ URL: <http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~eccd>

■ 内容

- 活動の目的と内容、メンバー
- シンポジウム・セミナーのお知らせ・記録
- 活動成果のダウンロード
- 幼児教育データベース
- リンク
ほか

4. 国内・国際ネットワークの形成

1. 国内ネットワーク

セミナー・シンポジウム開催

国内関係諸機関からの参加、意見交換

研修受け入れなどへの協力

協力隊ネットワーク

協力隊派遣前研修

協力隊員によるハンドブックへのコメント

NGOとの連携、など

4. 国内・国際ネットワークの形成

■ 2. 国際ネットワーク(1)

■ ①国際機関

- UNESCO: 「UNESCO Policy Briefs on Early Childhood」(幼児教育政策論集)について、本拠点から幼児教育の専門家としてレビューし、コメントを提供するという形で協力
- UNESCOからの委託によりネパール教育行政官の研修受け入れ

4. 国内・国際ネットワークの形成

■ 2. 国際ネットワーク(2)

■ ②途上国行政機関

- ベトナム教育訓練省幼児教育局
- 他、ネパール、モンゴル、カンボジアなど

■ ③途上国の大学・研究機関

- 幼児教育に関する学術交流(協定)
- モンゴル国立教育大学
- ハノイ教育大学
- タンロン大学、など

幼児教育に関する情報収集と幼児教育モデルの提案

浜野 隆（お茶の水女子大学）

E-mail: hamano@cc.ocha.ac.jp

拠点ホームページ：http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~eccd/

1. 報告骨子

- (1) 幼児教育・乳幼児発達支援（ECD：Early Childhood Development）の意義
- (2) 本拠点の活動目的
- (3) 本拠点の活動内容
 - ① 幼児教育の国際協力に関する知識・情報の集約、知識マネジメント
 - ・ 幼児教育分野の国際協力の潮流とプロジェクトレビュー
 - ・ 途上国における幼児教育（現地調査）
 - カンボジア、ベトナム、スリランカ、フィリピン、ネパール、パキスタン等
 - ・ 資料や成果物をホームページにて公開
 - ② 我が国の幼児教育に関する知識・情報の集約
 - ・ 国内の幼児教育に関する学術論文、紀要、報告書等の収集およびデータベース化
 - ・ 『幼児教育ハンドブック』『Early Childhood Education Handbook』の作成
 - ・ 日本の幼児教育に関する「映像資料」の作成
 - ・ 日本の幼児教育に関する「歴史資料」の作成
 - ③ 効果的な研修プログラムの開発および研修の実施
 - ・ 研修の対象：教員、行政官、研究者
 - ・ 現地における研修
 - スリランカにおける『幼児教育ハンドブック』を用いた教員研修
 - ・ 来日研修
 - ネパール教育省 ECD 担当者の来日研修、モンゴル研究者の来日研修
 - ベトナム行政官の来日研修
 - ④ 幼児教育支援に関する情報提供およびネットワークの形成
 - シンポジウムの開催、「国際教育協力セミナー」の開催
 - 国内・国際ネットワークの形成：①国内（JICA、JBIC、NGO など）、②国際（国際機関、途上国行政機関、途上国の大学・高等教育機関、等）

2. JOCV より：幼児教育ハンドブックに対する意見及び活用事例

・以前活動先の子供の父親で、英語が堪能な人が「日本の保育園や、幼児教育について知りたい」と言ったので、ハンドブックの英語版を貸してあげたところ、読破して「うちの園にも、日本の保育の10%くらいを取り入れて、試して行ってほしい」という難しい？感想をいただきました。日本の幼児教育に興味がある人へ、紹介するには便利な本です。ただ、本に載っていることが日本の幼児教育、幼稚園・保育所のすべてではないし、そもそも日本の幼児教育が良いのか、といったらそうでもないと思います。日本の保育士、幼児教育関係者として、私たちは常に自国の幼児教育について、考え、見直し続けなければならないと思

います。

・写真で日本の園の様子が紹介されているので、自分がやりたい活動を言葉で十分に伝えられない時など便利だと思う。ただ日本の園の紹介、というだけでは、やり方によっては「日本はお金があるからこんなことができるのだ」という印象だけを与えかねないので注意が必要なのでは？

・さっそく保育園で活用させてもらいました。園長が英語が少し分る人なので、保育園のカリキュラム・1日の流れについて、本を見ながら少し話をしました。写真も多く、今まで知らなかった日本の保育を知れて、とても興味を示してくれました。その後簡単に時間割を園長が考えて、少しではありますが、だらだらとした保育にしまりが見えたようにも思います。ハンドブックを見ながら、保育について話し合う機会を、少しずつ増やしていきたいです。いままで、日本の保育について説明しても、いまいち納得のいかない様子の園長でしたが、ハンドブックに書かれていることは、分りやすく、写真も多いので興味を引きやすいようです。今後も活用していきたいです。

・子供を持つ親としてもすごく良いハンドブックだと思った。一緒に働く先生たちにアラビア語で伝えるときに良い参考になると思う。親に見せても参考になるのでは？かべに突き当たったときにも良い参考になるのでは？

・写真のクラス担任が掃除する姿にはなんで？と興味を示していた（こちらには清掃専門の職員がいるので）。**園生活のビデオもあると尚嬉しい（注1）**。公立の幼稚園を載せると一番良いのでは？私立は設備も良すぎるところがある。発展途上国の人はそういうところに着目する傾向にあると思う。内容が濃いと思った。隊員自身が本をよく読みこんで資料づくりに役立つには良いと思う。写真を有効に活用していくと良いと思う。

・写真が多く、カラーで出来ていて良かった。現地語訳があるとなおよい。日本の保育の紹介というだけでは日本はお金があるから…という印象だけを与えかねない。園長とブックを見ながらカリキュラム、一日の流れについて話すことができた。保育園で実際に紹介した。保護者に英語バージョンを見せると「是非日本の保育を」といわれた。言葉で伝えることが難しい時に見せると便利である。

・日本の幼児教育や具体例、写真も掲載されており、利用しやすい。残念ながら、私の配属先である幼稚園の同僚は興味を示さないが、向上心のある同僚がいるところでは、英語版もあり、大いに活用できると思う。途上国における子どもを取り巻く環境は、貧困や飢餓、児童労働などだけでなく、精神衛生上にも厳しいところがある。だからこそ途上国でたくましく生きていけるのかもしれないが、多くの可能性をもっている子どもの力を踏みにじっているようにも思えてならないときがある。

振り返ってみれば、戦後の日本も同じような状況だったのではないかとふと思うことがある。父母が幼児期のころは幼稚園、保育所などなかったし、兄弟で面倒を見るのが当たり前、家の手伝いもする、思いきりたたかれる、など。戦後、日本がどうやって幼児教育を発展させたのかが今、私の一番知りたいことである。決して幼稚園という現場だけで発展させたのではないと思う。省庁やほかの学校改革（教育レベルの向上）、保健衛生などが総合的に絡まりあったのだと思われる。**「戦後の日本の幼児教育の発展」(歴史)についても記載していただく、何かヒントを得られるのではないかと思う。(注2)**

(注1) 日本の幼稚園の映像資料については、17年度の事業として作成しました。

(注2) 日本の幼児教育の歴史資料については、17年度の事業として作成しました。